

第三回新鋭評論賞 準賞

島村元考

―虚子の後継者と目されたのはなぜか

松枝 真理子

島村元考

― 虚子の後継者と目されたのはなぜか ―

松枝真理子

一 はじめに
 大正時代のホトトギス俳人・島村元は、將
 來を囑望されながらも三十歳で亡くなったこ
 とから、夭折の俳人として広く知られている
 活躍した期間が短かったためであろうか、
 彼の俳句、人柄、生き方など、夭折した以外
 のことについては、今日まであまり語られて
 きてはいない。しかし、彼を紹介している資
 料は決して多くないのにも関わらず、虚子
 から後継者として目さされていたということだ
 けは、まことしやかに伝えられている。
 あるいは虚子自身、俳誌「玉藻」に連載し
 た「立子へ」において、こう語っているから
 かもしれない。
 「私も『ホトトギス』を三度、人に譲ろうと
 思ったことがあった。一番はじめは、島村元
 さんが何かやってみたいと話があった時分に
 元さんがやる気があるのならばやらしてみ
 もいいものと考えたことがあった。」
 元の俳人としての実際的活動期間は、大正

鎌倉に引越した両親が虚子と懇意になったこ	とがきっかけとなり、当時芦屋の叔父のもと	にいた元に、出版されたばかりの『俳句の作	りやう』を送ったことからである。	ほどなく、元は住居を両親の住む鎌倉に移	し、虚子から直接教えを受ける。	『ホトトギス』雑誌欄初入選は大正四年十	二月号で、初入選にして第八席、十三句入選	の快挙であつた。その後、十一回巻頭を得る	また、『ホトトギス』の編集部でも活躍する	大正十一年三月、虚子と共に行つた九州旅	行中にひいた風邪から肺炎になり、これがも	とで、療養もむなしく大正十二年八月二十六	日、三十歳で逝去。関東大震災の一週間前	であつた。	大正十二年七月二十五日『島村元句集』が	発行された。虚子による序文と母・米子によ	る後記。俳句三百七十二句、写生文二篇、俳	論三篇が収められている。
----------------------	----------------------	----------------------	------------------	---------------------	-----------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-------	---------------------	----------------------	----------------------	--------------

彼の道性を見極めたうえでのことであつたのだらう。頼まれた虚子も無論悪い気はしないはずである。また子煩悩の虚子のことである。四女の六を亡くしたばかりでもあり、島村夫妻の息子を思う気持ちには虚子の心に響いたに違いない。その頃病氣療養中の虚子にとつて元を指導する時間をたつぷりととれたことも幸いであつた。虚子は、元を大変かわいがりに後にこのように語っている。

「後進という側で最も親しく私が手を取つて教えたというような人は島村元だつた。これは親父さんから頼まれて俳句を教えてくださいというので：：当人も病氣のために学校を止めてから俳句に打ち込んだですね。家には相当の財産があつて窮さない人でしたから俳句を専門にやろうという気が起つたのです。私もそういう風に親父さんから依頼されたから相当に身を入れて導いていました。頭もなかなか俊敏で、立派な作家になるだらうと前途に嘱望していたです。」（『俳談』）

そ	れ	は	、	虚	子	の	長	男	・	年	尾	の	回	想	に	も	こ	ん	
な	記	述	が	あ	る	こ	と	か	ら	も	わ	か	る	。					
「	父	は	は	じ	め	さ	ん	の	才	能	を	よ	く	認	め	て	、	そ	の
伸	び	て	行	く	の	を	楽	し	く	見	守	つ	て	ゐ	た	や	う	で	あ
つ	た	」																	
「	父	も	心	か	ら	は	じ	め	さ	ん	の	指	導	を	楽	し	ん	で	ゐ
る	風	が	あ	っ	た	」	「	ホ	ト	ト	ギ	ス	」	昭	和	二	十	九	
年	六	月	号	」															
ま	た	、	両	親	の	見	込	ん	だ	通	り	、	俳	句	は	元	に	非	
常	に	合	つ	て	い	た	と	み	え	、	彼	は	原	石	鼎	へ	宛	て	た
手	紙	に	お	い	て	、	実	に	若	者	ら	し	い	告	白	を	し	て	い
る	。																		
「	今	更	申	す	の	も	可	笑	し	い	事	で	す	が	俳	句	程	私	の
心	臓	に	強	く	色	付	け	た	も	の	は	あ	り	ま	せ	ん	。	私	は
恋	を	し	て	居	る	最	中	で	も	未	だ	家	の	も	の	事	を	心	
の	一	隅	に	置	く	余	裕	を	以	て	居	た	も	の	で	し	た	が	、
此	頃	は	何	事	を	す	る	に	も	俳	句	上	の	興	趣	を	第	一	に
し	て	、	そ	の	次	に	私	を	認	め	る	と	云	ふ	風	に	な	つ	て
居	ま	す	」																

作をしなかつた元であるが、大正十年以降の	後期の句は虚子の序文でも、次のように評価	されている。	「大正十年以降に至って再び熱心に句作し始	めた。さうして今度はすっかり姿を一変して	：：深くものを味ひ、十分に観察し、而して	現はすに省筆を以てするやうになつた。」				友を食むおたまじやくしの腮かな	水仙や日のあたりたる寒暖計	一片のなほ空わたす落花かな	五月雨や立ち眠りして座敷犬	春雷や布団の上の旅衣	日ざし来て紫うすし藤の花	木蓮や数へやめたる花の数			「春雷」の句は、虚子との九州旅行中、大	正十一年三月二十四日の福日俳句会の当日吟	である。虚子は、	「自然で、深い旅情のある句である。先づ此
----------------------	----------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--	--	--	-----------------	---------------	---------------	---------------	------------	--------------	--------------	--	--	---------------------	----------------------	----------	----------------------

で、	元もその一人である。	句会欄に掲載の句会報によれば、出席は九人	催した。「ホトトギス」同年六月号の地方俳	町の住友クラブにて、第一回淀川俳句会を開	ともに大正六年三月二十五日、大阪土佐堀裏	櫻坡子は彼らの薫陶を受け、数名の仲間と	はずである。	いて、芦屋滞在中の元もよく顔を出していた	トギス派の根城とでもいうべきものになつて	英学館を経営していた。ここが大阪の純ホト	もとに通うようになる。泊月は当時、私塾日	て虚子の警咳に接して感激し、その後泊月の	後、かなり長い講演もしたのだが、彼は初め	たばかりの大橋櫻坡子がいた。虚子は句会の	出席者三十八名の中には、俳句に手を染め	あろう。	そかにできないという心持ちからだだったので	えたときに、大阪を中心とする関西圏をおろ	ている。それは、「ホトトギス」の経営を考	でに、たびたび大阪へ足を運び、句会を催し
----	------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

淀川俳句会の句稿は、元の幹旋により鎌倉	へ送られ、虚子に直接選を仰いだ。元は最も	熱心な協力者であった。	こうして、関西に初めて本格的な純ホトト	ギス系の句会が誕生したことになる。また、	淀川俳句会から六葉会、大阪医大俳句会など	が派生したことをも考えると、この句会の発	足は大きな意味を持つのである。				2 「みつやま」創刊		さらに俳誌「みつやま」についても触れね	ばならない。			「みつやま」は、当時関西に純ホトトギス	系の雑誌が存在しなかったことから、元が芦	屋に滞在中に発案したものである。			共に計画し、中心となった原田浜人、岩崎	秋灯、永岡一坡が当時住んでいた奈良・大和	郡山に発行所をおき、大正六年七月に創刊し	た。命名は虚子による。雑詠にあたる「みつ	やま句帖」は石鼎選、初学雑詠欄は浜人選。
---------------------	----------------------	-------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------------	--	--	--	------------	--	---------------------	--------	--	--	---------------------	----------------------	------------------	--	--	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

題詠の選者は、元の他に、西山泊雲、泊月、	杉山一転、浜人、池内たけしなどが当たり、	諸家近詠は、題詠選者はもちろんのこと、村	上鬼城、石鼎、普羅、原月舟、飯田蛇笏など	の作品が順次掲載された。今から見ても、そ	うそうたる顔ぶれである。	元は「烏眼坊」というペンネームで「玉屑	録」という連載を受け持っていた。それは、	こんな出だしから始まる。	「ある人師に問うて曰く、……」	言うまでもなく、「ある人」は元本人であり	「師」は虚子のことである。	内容は、元が折に触れて虚子に質問したこ	と、それに対する虚子の答えを紹介するもの	である。	元は機会があれば虚子の近況や俳話などを	何らかの形で紹介して、自分の知り得る虚子	についてできる限り広めたいと考えていた。	元にとつて、「みつやま」はその絶好の場所	であったといえる。
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	---------------------	----------------------	--------------	-----------------	----------------------	---------------	---------------------	----------------------	------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------

（元さんは）鼻のような大きな眼を開けて、いろいろ我々に俳句の話をされたのであった。その一つの「鎌倉の虚子先生と一緒にあるところ」で酒をくみ交していた。その時に一びきの大きな灯取虫が、私のコップの中に音を立てて落ちてきた。私は思わず「あっ」と声を立てた。虚子先生はその「あっ」「あっ」が所謂感興というものですよといわれた。という話はいまも耳底にこびりついていっている。（中略）そういう話を、秋灯、泊露、皓火の諸君と共に私は目を輝かせて聞いていたのであった。

と回想している。櫻坡子のように、普段虚子と接することのない者にとつては、虚子のこと、が身近に感じられ、ますます虚子への憧憬が強くなるはずである。

「玉屑録」も、読者に好評であつたに違いない。櫻坡子によれば、それは赤星水竹居による虚子俳話集「東京便り」に匹敵するものである。ではないかという。この「東京便り」は虚子自身も面白いと感嘆したという名著である。

この「雨傘」は『島村元句集』に収録され	こんなエピソードがある。	また、元の執筆した随筆「雨傘」について		ます。」	います。お著いのに恐縮ですが御願ひ申上げ		二 私の郷土	点の中一二	一 虚子先生の人格に就いて私の学ぶべき諸	座いますから御書き下さいませんか	の『みつやま』の質問、原稿に一二頁でよ御	「御免倒で御座いましてようが、先日の御願ひ	月三十日消印のものである。	を送っていたことからわかる。大正六年七	それは、元が石鼎に編集者さながらの手紙	を注いでいたようである。	は一坡が担当していたが、元もかなりの情熱		「みつやま」の編集は当初秋灯が、その後
---------------------	--------------	---------------------	--	------	----------------------	--	--------	-------	----------------------	------------------	----------------------	-----------------------	---------------	---------------------	---------------------	--------------	----------------------	--	---------------------

ているのであるが、「ホトトギス」に掲載されたものではなく、「みつやま」大正七年一月号に掲載された。浜人の回想によれば、この「雨傘」だけは（虚子）先生にもほめていただいたと元が言っていた。そうである。浜人曰く、「あの名篇をホトトギスへ出さないで、『みつやま』に出したほど元さんは『みつやま』に力を入れ居ったのであった。どうも態度が真剣であった。「雨傘」は、元が奈良を訪れた際、「坡の案内で法隆寺に遊んだ話をもとにしている」とから、元としては「みつやま」に掲載するのがふさわしいと考えたのかもしれない。しかし、「みつやま」の発行部数はせいぜい百部程度であったこと、また「みつやま」の読者はほぼ「ホトトギス」の読者と重複していることを考えると、あえて「みつやま」に出した元の人柄が見えてくるのである。

話	し	合	い	の	場	で	虚	子	は	、	浜	人	に	「	み	つ	や	ま	」	だ	が	、	「	み	つ	や	ま	」	は	大	正	七	年	一	月	号	（	第	七	号	）	で	廃	刊	と	な	っ	て	し	ま	う	。	話	は	少	し	前	後	す	る	の	だ	が	、	そ	れ	は	虚	子	の	大	和	郡	山	訪	問	か	ら	始	ま	る	。	「	み	つ	や	ま	」	が	発	行	さ	れ	て	数	か	月	経	つ	て	の	十	月	二	十	四	日	、	四	国	・	九	州	旅	行	の	帰	り	に	、	虚	子	は	元	を	伴	つ	て	浜	人	宅	を	訪	れ	た	。	「	み	つ	や	ま	」	に	つ	い	て	相	談	し	た	か	っ	た	か	ら	で	あ	る	。	浜	人	は	、	元	来	一	徹	な	性	格	で	あ	る	。	虚	子	は	彼	の	俳	句	に	か	け	る	ひ	た	む	き	な	情	熱	に	驚	き	の	念	を	抱	き	、	「	進	む	べ	き	俳	句	へ	の	道	」	で	は	こ	の	よ	う	に	述	べ	て	い	る	。	「	そ	れ	か	ら	後	更	に	驚	か	さ	れ	た	の	は	其	句	作	熱	の	旺	盛	な	こ	と	で	、	雜	詠	の	句	を	二	十	句	に	限	つ	た	こ	と	に	就	い	て	苦	痛	を	訴	へ	来	つ	た	」	「	其	為	に	大	分	長	い	手	紙	を	よ	こ	し	て	今	少	し	の	句	数	の	制	限	を	自	由	に	す	る	こ	と	を	要	求	し	て	来	た	」	彼	の	こ	の	よ	う	な	性	質	を	ふ	ま	え	た	上	で	、	虚	子	と	の	や	り	と	り	を	見	て	い	き	た	い	。	話	し	合	い	の	場	で	虚	子	は	、	浜	人	に	「	み	つ	や	ま	」
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

を地域の雑誌と考えているのか、それとも全
国誌にしようかと考えているのかと問うている
もともと虚子は「みつやま」のあり方につい
て、「全国誌は『ホトトギス』だけで、『み
つやま』は関西一円の雑誌でよい。」と考えて
いた。こんな虚子に対して、浜人はかなり抵
抗、反論したようである。
しかし、皮肉なことに、この虚子の訪問が
「みつやま」廃刊への流れを作ってしまった。
様子を見ていた元が、ごたごたの渦中に入る
のを嫌ったのである。虚子を信奉している元
であるから、虚子の意にそぐわないことはし
たくなないと手を引いてしまったのだ。元は「
みつやま」に相当な経済的援助をしていたと
言われている。元という後ろ盾を失えば、当
然雑誌を発行することはできなくなる。
とはいえ、結果的にはわずか七号で廃刊と
なってしまったものの、当時関西にホトトギ
ス派の雑誌がなかったことを考えると、「みつ
つやま」創刊の意義は大きかったのである。

「俳句内容の散文化傾向に就て」	（大正八年
九月号）	
「描くことは観ることだ」	（大正九年一月号
「セザンヌの林檎」	（大正十年四月号）
「連作の選に就て」	（大正十年十一月号）
「感興といふ事」	（大正十一年四月号）
俳論の内容は大きく二つに分けられる。	一
つは自らの写生論。もう一つは初心者へ向け	
て、写生について説いたものである。	
この頃、虚子は主観から客観重視への方向	
転換を進めていた。「ホトトギス」誌上で大	
正四年四月号から始まった「進むべき俳句へ	
の道」の連載も、当初は主観中心の句を新し	
いと評する内容であつたにもかかわらず、大	
正六年八月号における結語は「客観の写生」	
を主張してまとめられている。	
そこには、虚子の指導者、経営者としての	
事情もからんでいた。一般の人々に俳句を広	
める、あるいは指導していくとなると、主観	

を	そ	生	中		解	を	者	も		で	導	た	自	ら	て	の	え	と	中
展	の	を	心	前	説	を	者	も	編	い	者	た	身	客	の	て	で	と	心
開	傾	を	の	に	す	を	者	も	集	た	へ	と	の	親	販	の	で	中	
し	向	を	の	述	る	を	者	も	部	い	、	い	指	へ	売	の	、	心	
て	へ	を	の	べ	も	を	者	も	員	わ	虚	う	導	変	部	販	、	で	
い	と	を	の	の	を	者	も	で	け	子	わ	理	わ	数	売	、	は		
た	進	を	の	た	の	を	者	も	あ	で	の	け	念	つ	を	部	、	限	
わ	む	を	の	よ	あ	を	者	も	っ	あ	意	で	を	あ	減	を	界		
け	と	を	の	う	っ	を	者	も	た	つ	識	は	確	っ	ら	を	が		
で	同	を	の	に	た	を	者	も	元	ま	の	立	し	た	さ	広	あ		
あ	時	を	の	、	。	を	者	も	は	り	転	て	、	の	な	げ	る		
る	に	を	の	元		を	者	も	、	。	換	、	客	の	い	る	こ		
	、	を	の	の		を	者	も	そ	そ	と	、	観	め	た	と	と		
	自	を	の	句		を	者	も	の	れ	い	、	写	、	た	が	考		
	分	を	の	は		を	者	も	あ	は	う	文	生	、	。	で	こ		
	な	を	の	も		を	者	も	た	、	要	か	を	虚	、	き	こ		
	り	を	の	と		を	者	も	り	、	素	ら	を	子	、	る	こ		
	の	を	の	と		を	者	も	の	、	も	指	を	は	、	と	こ		
	理	を	の	と		を	者	も	事	、	含	を	唱	主	、	考	こ		
	論	を	の	描		を	者	も	情	初	ん	を	え	観	し	考	こ		
		を	の	写		を	者	も		心				か	し	考	こ		
		を	の	写		を	者	も							し	考	こ		

とくに一写生句最近の傾向に就て一では、
当時の写生の技量の進化を論じながら、物
象の実在そのものを俳句にする際、形だけを
詠むことで句が形骸化することを危惧した。
また、元は、現今の句は実在そのものを写生
することが中心であり、他の主眼的情景の副
次的作用を務めているわけではないと、写生
句にも近代的な立場があると主張した。それ
は、後に虚子の展開する花鳥諷詠論に結びつ
いていくものであり、その掛け渡しとして、
元は重要な役割を果たしたと言える。
明朗快活、行動力があつてリーダーシップ
がとれる好青年といふのが元に対する私の印
象である。それだけでなく、俳句が何より好
きでよく勉強した。また、素直な性格で、心
から虚子のことを尊敬していた。
特に大正六年の関西における活動、大正七
八年頃執筆した俳論に注目すれば、これらは
全て敬愛する虚子の啓蒙活動を助け、「ホト

トギスーの版促キャンペーンとも言えるものである。こんな元だったからこそ、虚子は他の弟子と区別して、後継者と考えたのではなからうか。

六 終わりに

元の死後約二十年経ってから、皿井旭川による『旭川句集』が上梓された。旭川は、既出の元の叔父・皿井立三郎の俳号である。元の一周年忌の追悼句会で初めて句作をし、その後「ホトトギス」に投句をはじめたのだ。

当時、虚子は多忙のため、句集の序文を依頼されても全て断っていた。しかし、旭川には手紙という形で長い文章を寄せている。その内容は序文と違ってもおおかしくないものであるが、その中に元についての記述があり、ここに一つの答えがある。

「それにつけても元君の死はかへすがへすも残念なことでありました。元君が生きてゐたらと思ふことは度々であります。元君は俳句

が旨かった計りで無く、師弟の情宣に於ても
厳格でありました。一
終わりに、元が虚子へ宛てた最後の手紙を
抜粋して掲げたいと思う。死期が間近に迫っ
ている元であるが、なんと虚子の体調の心配
をしているのだ。文面には師に対する思いが
あふれている。
一先日来心にかかって居た先生への手紙を書
きます。先日御目にかかった印象で一番私を
喜ばしたのは、ビルディングに於ける一日の
仕事を終へて直ぐに来られたに不拘、一寸も
疲れたやうな御顔でなかつた事、第二色がや
や黒く元氣さうになつて居られた事、言葉も
従前の如く明晰になられた事等でした。一
一又誕生日には態々キヌゴシ豆腐東京から御
持参被下コンナ事は実に心からの御同情でな
くては出来ぬ事、感涙に咽びました。そうし
て自分は今迄にこんな親切を人に施した事が
あるであらうかと考へて見て、今度の病氣に

ついで先生の心からの御同情をつくづく感銘
致しました。」

その元が他界し、一週間後に関東大震災に
見舞われた虚子の心中はいかばかりだったで
あろうか。結果として未遂に終わったが、一
ホトトギス一を譲渡するという二度目の大き
な決断を虚子がしたのは、この時期のことで
あった。

※引用文中の旧字体は新字体に書き換えた。

※鳥村元は、当初「はじめ」と署名していた
が、大正十年十月頃より本名の「元」に改
めた。本稿では「元」で統一した。

参考・引用文献

『島村元句集』島村元（大正十三年、私家版）

『旭川句集』皿井旭川（昭和十八年、天理時報社）

『定本 高濱虚子全集』第十卷・第十一卷

（昭和四十九年、毎日新聞社）

『大正俳壇史』村山古郷（昭和五十五年、角川書店）

『大正の大阪俳壇』大橋櫻坡子（昭和六十一年、和泉書院）

『大阪の俳人たち4』大阪俳句史研究会編（平成七年、和泉書院）

『大正の俳人たち』松井利彦（平成八年、富士見書房）

『俳談』高浜虚子（平成九年、岩波書店）

『立子へ抄』高浜虚子（平成十年、岩波書店）

『俳句の歴史』室町俳壇から戦後俳句まで』

山下一海（平成十一年、朝日新聞社）

『大正秀句 新版』富安風生（平成十二年、春秋社）

